



口絵4 絹本着色楊柳観音像（円生院）

奈良 円生院所蔵 絹本著色楊柳観音像の保存修理

中 島 博

修理年度 平成十六年度

事業者 宗教法人 円生院

(奈良県生駒市、代表役員 池尾宥順)

事業助成者 財団法人 住友財団

修理施工者 株式会社 文化財保存

一、はじめに

奈良盆地の西北部を限る矢田丘陵の北部東麓に位置する古寺長弓寺の子院、円生院に所蔵される「絹本著色楊柳観音像」は、元時代の質の高い仏画として貴重な存在で、以前から注目されていた⁽¹⁾。しかし損傷が甚だしかったため、当館に寄託されていたが、展示を控えざるを得ない残念な状況にあったが、今般幸いに、住友財団の助成を受けて、保存修理を実施することができた。修理の過程で得られた知見をまじえつつ、修理の概要を報告する⁽²⁾。

二、修理前の状態

①横折れ

修理前(図1)の損傷状況を記しておく。まず、年数を経た掛幅の古書画に一般的に見られることとして、画面全体にわたり多数の強い横折れが目立っており、折れ山の一部には擦り切れを生じ、あるいは折れ山で料絹が断裂した部分で裏打紙から剥離し、料絹の欠損へと進みかけたところもあった。この折れは、裏打紙が酸化などにより硬化し、巻き癖が取れにくくなった状態で展開すること起因するものと考えられる。ただし本品の場合は幸いに、ほとんど折れの段階に留まっており、危険ではあるが深刻な状況ではなかった。なお、一般に折れを修正するためには、「折れ^お伏せ^ぶ」と称される、細い帯状の紙を裏から折れに当てるように貼ることが行われるが、本品でもそれが認められた。過去の修理時におけるその作業に際し、折れ伏せを施すべき位置にあたりを付けるため、裏打紙の裏から折れをたどって墨線が引かれたと見受けられ、彩色の少ない箇所では、その線が表の画面に透けて見えていた。



图2 修理後

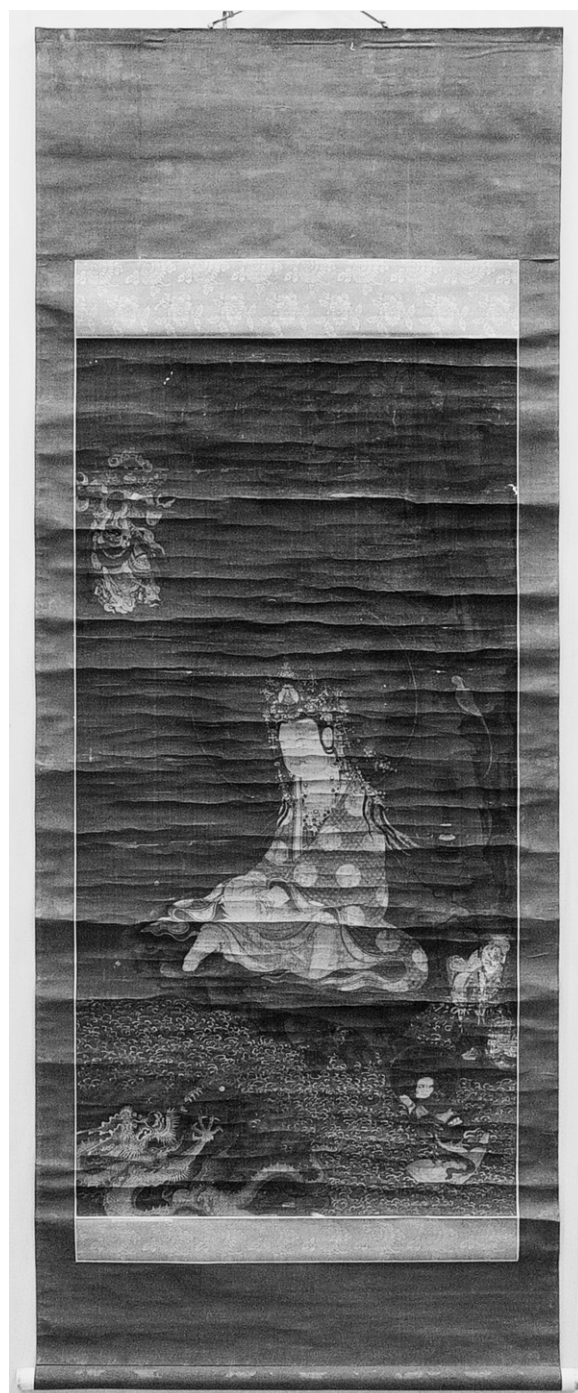


图1 修理前

②彩色の剥落

本品は汚れも比較的少なく、当初の彩色をかなり良好に保存しており、それが文化財として特筆される点でもあるが、詳細に観察すると、着衣の裳部分をはじめ、観音の額や手など肉身部などにおいても、顔料が、絹目の一つずつという小さい単位で剥落する状況がかなりの範囲に広がっているのが認められる(図3)。これは、彩色の層が厚くなく、料絹をかううじて覆う程度にしか施されていないので、ある程度の面積をもった彩色片として剥落する事態を生じなかったと判断される。そのため、剥落によって図様が欠損するような重傷には到らず、かすり傷程度の被害に留まっていたのである。しかし、これによって彩色の効果がかなり損なわれているのは否定できず、またこの状態を放置すればいずれ図様の欠損にまで進むことも予測できるので、弱まっているとみなされる顔料の膠着力を回復する処置を施す必要が当然あった。

なお、顔料の剥落に関しては、観音の向かって右下の岩上に描かれた、布袋と見られる像の部分において、他とは異なる仕方の剥落を顕著に示しているのが注目される(図4～9)。この部分では、布袋像の彩色が大幅に剥落した下から、彩色まできちんと行われた別の僧形像が現れており、さらに注視すると、その僧像にも二重の描写が認められるという、複雑な構造になっている。すなわち製作の順序を追って記すと、最初に、観音の方を向いて合掌し直立する青衣の僧が描かれ、次に、それとほとんど重なる形でわずかに大きく、緑衣の僧に描き替えられ、最後にもう一回り大きく、僧像を完全に覆い隠す形で、布袋像が、胴部は観音の方に向けながら上体を反対側へねじ向け、右手に長い杖を突き立て、左手には袋を提げる姿で

描かれている。僧像を塗り隠す必要から、布袋像は厚塗りを余儀なくされたため、観音像などに比べて、面的な剥落を生じやすかったのであるが、中でもあまり彩色のなかった風景部分に施された布袋の彩色は比較的保存されたのに対し、僧像と重なる部分においては、ほとんど剥落したわけである。二番目に描かれた僧像の緑衣は、一番目の青衣より若干はみ出して描かれた部分では、風景部分に塗られていたため料絹にしっかりと付いて、布袋の胸から腹にかけてのあたりによく残って輪郭を留めているのに対し、青衣と重なった部分は、布袋の彩色と一緒にほとんど落ちてしまったと見受けられる。このため、緑衣の僧像は、主体部があらかた剥落し尽くして、姿をほとんど留めなくなり、現状では一見したところ、最初の青衣の僧と布袋との二重像のようになっていいる。なお、顔料と紙の繊維とが



図3 膠着力の低下によって絹目の中の絵具が剥落している

加筆人物像の調査写真



図6 修理前 赤外線画像（透過光）



図5 修理前 赤外線画像（反射光）



図4 修理前



図9 裏面 赤外線画像（透過光）



図8 裏面 赤外線画像（反射光）



図7 裏面

混じった状態の層が剥離している箇所があり、また布袋像の顔料には全体に紙の繊維が多く混じっていることから、修理担当者による一つの推定として、布袋像を描く前に、僧像の上に薄い紙が貼られ、その上に彩色する過程で紙の繊維が顔料に巻き込まれたのではないかと考えられたが、紙を確認することはできない。

以上のような事情で、この部分における彩色の状態はきわめて不安定であり、図様変遷をうかがうことのできる現状を確実に保存するため、剥落止めを特に緊急に要していた。

また、画面全体にわたって、長年用いられてきたことによる、自然な汚れが表面に付着していると見受けられ、そのため彩色の鮮明さが幾分か損なわれているようにも思われた。

③料絹の損傷および裏打ちとの関係

料絹の欠損した部分はあまり多くないが、そこには、料絹と色などの異なる別絹を補ったり、あるいは絹を補わず裏打紙に直接墨を塗って傷を目立たなくしようとした箇所があった。

料絹は現状では濃い茶色を呈しており、それに対し、修理時に施されたとみられる裏打ち紙の色合いは茶色ながらやや明るめで、しかも墨気の強いものであるため、料絹と馴染みにくい。顔料の施されていない部分においては、織目を通して色合いの異なる裏打ちがよく見え、逆に言えば料絹の織物の組織がくっきりと目立つ、いわゆる「地透け」の状態になり、その部分に墨で描かれた図様が見えにくくなっていた。料絹が生なまの素材として表面に出るのを抑え、絵を見やすくするためには、この色の不調和を解消しなければならぬ。

以上、総じて本品の画面に生じていた損傷および過去の修理の不具合は、一般に絹本の掛幅画に見られる症状の範囲を基本的に出るものではなく、特別の困難があらうとは予想されなかった。ただしその中では、最も不安定とみなされた右下の重ね描きの部分を、現状通りに保存することが、最大の注意点として確認された。

④表装

表装に関しては、修理前は白茶地牡丹菊文金欄の一字に、濃萌葱地洋花文緞子の総縁そうべりという袋表具かぶろひょうぐの簡素な形態で、また軸首じくしゅは骨製の印可軸であった。この表装は、中国式の鑑賞画には普通であるものの、仏画としての荘厳さには欠ける面があった。

三、修理方針と施工

事前の詳細な調査に基づき、ほぼ通常の手順に従って施工することができるという見通しが立てられた。すなわち修理方針の概略は、顔料の剥落止めを十分に行い、料絹の欠損部には適切な補絹を施して損傷の拡大を防止し、裏打ち紙を打ち替えて掛幅としての構造を更新し、表具を一新して通常の仏画にふさわしい体裁を整えることとした。

以下、施工手順に従って、修理内容を記す。

①剥落止め（一）

損傷への対応の中で最も緊急性があったのは、放置すれば図様の消失につながりかねない、顔料の剥落止めであった。軸装を解体し

た後、最も危険な箇所であった右下の重ね描き部分に、剥落止めを十分に行った。兎膠水溶液（ニパーセント）に、層状剥離の接着に必要な粘性を強化するため、メチルセルロース（木材繊維を原料に生成される水溶性の物質、分子量一万五千、三パーセント水溶液）を加えた混合液を用い、層状に剥離している小口に液を差し込むように塗布してなじませた後、表面からも塗布して安定させた。浸透しにくい箇所は、表面にたまった余分の液を除去し、安全を確認した後、重しをかけて、接着を確実にした。

② クリーニング

画面上から濾過水を噴霧し含浸させ、水に溶け出た汚れを、下に敷き重ねた吸収紙に吸収させる方法で、表面の汚れを除去した。

③ 剥落止め（二）

兎膠ニパーセント水溶液を、彩色の各色ごとに塗布し、剥落止めを施した。

④ 表打ち

裏打ち紙のうち、料絹に密着する肌裏紙の除去は、水を多量に施す旧来の方法では彩色の汚染を招く恐れがあることを避けるため、近年一般化した「乾式肌上げ法」を採用することとした。その準備工程である、仮の支持体となる表打ちとして、レーヨン紙二層、楮紙二層を、接着力の弱い布海苔で画面の表に打った（貼った）。その後裏向けにし、

透過台に張り込んだ。

⑤ 肌裏紙除去

乾式肌上げ法により、肌裏紙を除去した。この際、絹の裏面に施されている裏彩色を損なわないよう、一気に紙として剥がさず、部分的にほんの少しの湿りを与えつつ紙の繊維をほぐしながら除去して行き、裏彩色の上にわずかに繊維が残存する程度に留めた（図10）。

なお、裏彩色は、観音の全身および頭光、その岩座の上面、承盤付きの水瓶とそれに挿した楊柳の枝、その岩座の上面、善財童子と頭光、その乗る蓮弁、空中の韋駄天、水中の龍、それが縋る岩、観音の脇の僧形人物、観音の背後の竹、岩に止まる鳥に、それぞれの形通りに、またそれぞれの内部でも諸部分に応じて綿密に、各色の顔料が施されている。



図10 裏面（旧補絹の除去後）

⑥旧補絹の除去

料絹には、横折れに起因する細い欠損が多く生じているが、図様を損なうほどの大きい箇所は幸いになかった。欠損部の一部には、過去の修理時に、裏から細い带状の絹が、大体の形で当てられていた。もとの料絹と少々重なったところもあり、それは料絹の欠損の拡大の原因になる恐れがあるので、補絹のなかった箇所も含め全欠損部に新たに適切な補絹を施すために、旧補絹はすべて除去した。

⑦補絹(一)

料絹の欠失箇所、料絹の組織に合った絹を、予め電子線で劣化させて料絹と釣りあう弱さにした上で、欠損箇所の形通りに嵌め込むように、補絹を施した。その後、次の工程に備えて養生のために、レーヨン紙を水で打った。

⑧表打ちの除去、および被膜の除去

表に返し、水分を与えて表打ちに用いた布海苔をゆるめ、表打紙を剥離し、その後画面上に布海苔の残存がないように、紙に吸着させて除去した。

その作業中、画面上に、表打ちに用いた布海苔とは異なる感触の、粘性のある物質が存在することがわかった。この物質は粘着性が強く、水分を与えると膜状を保ったまま膨潤した。これまでの工程で、彩色部分は表面から水分を与えたときに浸透しにくい様子があったが、それは表面を覆うこの物質のせいかと考えられる。これについて今回は科学的な分析を行わなかったが、過去の修理経験から、旧修理時に剥落止めのために塗布された、寒天ではないかと推測され

る。寒天膜が絵具層の表面に付着していると、その強い接着と伸縮によつて、顔料層を剥離させるように作用する危険があり、またそれが劣化すれば白濁することもあるが、寒天膜は水に溶けず、接着も強いいため、除去しにくい特徴がある。将来損傷の原因となりうる、寒天と思われるこの物質を、メチルセルロース水溶液を用いて膨潤させ、紙に吸着させる方法により、顔料層に負担をかけない程度で可能な限り除去した。⁽³⁾その後、次の工程に備えて、レーヨン紙で養生紙を打った。

⑨肌裏打ち

新たに用意した薄楮紙により裏打ちした。新肌裏紙の染色には、意図する色、特に赤味を出しやすいという理由から、化学染料の一種であるシリアス染料を用い、墨気は控えて、料絹に合わせた色調の、明るすぎない茶色に染め、小麦澱粉糊を用いて料絹の裏に打った。

⑨補絹(二)

裏から施した補絹について、表から見て絹目の調整を行い、また欠損の細部に表から補絹を加えた。

⑩増裏打ち^{ましろうち}

シリアス染料を主に用いて淡茶色に染めた美栖紙^{みすがみ}と、古糊^{ふるのり}を用いて、増裏打ちを行った。

⑪折れ伏せ入れ

料絹に折れが生じて傷んだ部分には、また折れが生じやすいのを防ぐため、「折れ伏せ」として、細く切った楮紙の帯を、小麦粉澱粉糊を用いて貼り付けた。その後、仮張りをして乾燥させた。

⑫ 裂地調整

修理前の表装は、仏画に不似合いであったため、裂地を一新し、仏画にふさわしい、二段仏表具の形式に整えることとした。中廻と風袋には縹地牡丹文金欄、総縁には茶地宝尽雲襷文綾を用いた。なお、軸首は蓮唐草文金鍍金軸を新調した。それらの裂地を寸法に裁ち、肌裏打ち、増裏打ちを施し、仮張りをして乾燥させた。

⑬ 付け廻し・中裏・総裏打ち

本紙に表装裂地を付け廻して軸装の形に仕立て、美栖紙と古糊を用いて中裏打ち、次いで宇陀紙と古糊を用いて総裏打ちを行った。

⑭ 補彩

新たな補絹部分を目立たせないことを目的に、料絹の現状の色を基準にして、やや控えめの色で補絹部に補彩を施した。

⑮ 張り返し・仕上げ

裏張りして十分に乾燥期間を置いた後、新調した軸首・上軸・下軸・啄木（掛緒・巻緒）等を取り付け、掛幅装に仕立てた（図2）。修理後の法量は次の通りである。

〈画面〉 縦一一〇・六cm、横五四・九cm

〈表装全体〉 縦一九五・五cm、横七〇・九cm

⑯ 保存箱

横折れの原因となる、巻き癖がつくのを避けるため、桐製太巻添軸を新調し、径を太くして巻き、包裂に包んで、新調の桐製二重箱に納入した。

【注】

（1）大和文華館の特別展「元時代の絵画 モンゴル世界帝国の一世紀」（平成十年）に出陳され、同展目録に写真を掲載し板倉聖哲氏が解説を付されているのが、一般に初めて紹介された機会であったと思われる。

（2）修理施工者は株式会社文化財保存（施工場所当館文化財保存修理所内装潢室、施工担当者大森育子氏）であり、この報告書の内容はおおむね、同社が作成した詳細な保存修理報告書に基づいている。ただし、一般の方に理解しやすいよう専門用語については言葉を改めたり補うなどし、その上で文化財保存の担当者に眼を通して貰ったが、本稿の文責は筆者にある。

（3）京都・光明寺所蔵、重要文化財「絹本着色四十九化仏阿弥陀来迎図」の保存修理（平成十四・十五年度、文化庁補助事業、施工者株式会社文化財保存、施工担当者大森育子氏）において、画面上に白濁した被膜の存在が認められ、分析の結果、寒天と判明した。おそらく前回の修理時に、顔料の剥落止めのために塗布されたものと推測される。水のみによる皮膜層の膨潤は、顔料層の膠着力を低下させる恐れがあることから、粘性のあるメチルセロロース水溶液を用いる除去法は、このときにも実施して成果をあげた。

口絵4は、当館資料室専門職員森村欽司撮影。
挿図1～10は、株式会社文化財保存から提供を受けた。

（なかしま ひろし 当館学芸課教育室長）

「英文翻訳」

白井 祥子

奈良国立博物館研究紀要

鹿園雑集

第八号

平成十八年三月三十一日発行

編集発行 奈良国立博物館

〒630-8233

奈良市登大路町五〇番地

印刷 株式会社天理時報社

天理市稲葉町八〇番地